



Title	南洋文学の研究 : テキストからの出発 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	土屋, 忍
Citation	北海道大学. 博士(文学) 乙第6888号
Issue Date	2013-09-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/53937">http://hdl.handle.net/2115/53937</a>
Rights(URL)	<a href="http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/">http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/</a>
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Shinobu_Tsuchiya_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

# 学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 土 屋 忍

## 学位論文題名

南洋文学の研究 ―テキストからの出発―

「序論 経由する南洋―『ふらんす物語』と『上海』を中心に―」においては、永井荷風の『ふらんす物語』と横光利一の『上海』を対象とし、それらのテキストにおいて、題名に上がっているフランスや上海のみならず、南洋が重要なトポスとして機能していることを明らかにした。また、明治期と昭和期を代表する外地文学を検討することを通じて、「経由する南洋」という問題系を抽出した。「経由する南洋」とは、大別して地理上の経由（物理的な体験）と思索上の経由（想像上の体験）とに概念化することができる。ただし、地理上の体験と思索上の体験とは、必ずしも作家の人生において合致するとも対立するとも限定されない。

本論は第一部「未知なる領土への眼差し―南洋文学の生成と展開―」と、第二部「体験の時代における方法の模索―一九四〇年前後・南洋文学の可能性―」の二部から構成されている。

第一部では主として明治大正期の南洋文学を取り上げ、第二部では昭和期の南洋文学を詳しく検討している。第一部では、まず第一章において、山田美妙の『あぎなると』と押川春浪『新日本島』の両作品を、明治期日本における南洋の植民地独立に共鳴する政治小説として再評価した。現在の南洋文学の研究の多くは明治期に目を向けない傾向にある。明治期の南洋文学の中心は政治小説であり、そのテーマの中心には植民地の独立、そのための革命に対する共鳴がある。なかでもフィリピンの独立をめぐる闘争に関しては多くのテキストが取り上げているが、この両作品はその代表である。

第二章では、南洋の「土人」という言葉の歴史に焦点を当て、単に「土人」を差別語として忌避するジャーナリズム上の言語習慣においては捉えきれない文学の系譜を認めている。論者は「南洋の土人」という用例における「土人」の語にこだわり、その起源と文学的表象を文学史において洗い出し、これまで隠蔽されてきた様々な事情とともに、そうした事情を踏まえてひそかに自身の表現に活用してきた文学者の営為を浮かび上がらせる。そこから、「土人」に身を重ねる系譜と、「土人」という言葉をイメージ論的観点から意図的に用いる表現の系譜が区別される。

第三章では、鶴見祐輔と芥川龍之介という大正期を代表する二人の知性による南洋言説と文学テキストを取り上げ、それらに見られる帝国主義に対するそれぞれの姿勢を比較検討している。論者によれば、この時期の知識人にとっては、政治を見ることと文学を考えることとの間に今日のような隔たりはほとんどなかった。そのような観点から、鶴見の道義的帝国主義が文学を通じて涵養されたことを『南洋遊記』から確認し、また芥川龍之介の「桃太郎」が内包する暴力の連鎖の問題とあわせて、帝国主義とヒューマンイズムの結節点において考察を行った。鶴見の論は現在の日本の価値観に近く、逆に、芥川の「桃太郎」から導かれるヒューマンイズムに対する懐疑は一般的な共感を呼ばない。

第二部では、まず第一章において金子光晴の『マレー蘭印紀行』が取り上げられる。このテキストにおいては、移動主体が移動先によって表象されず空白のままとされるように感じられる。そこには、「私」と明記される箇所と「私たち」と表象される箇所とがある。それについて従来は、テキストを旅の再現と見る立場から、実際の旅程と表現されている内容との不一致を問題とする枠組において考えられてきたが、論者はそれらを退け、テキスト内のイメージ表現の有機的な繋がりを論証して統合的な移動主体を見出すことができるとした。また『マレー蘭印紀行』における「マレー」

と「蘭印」の多くの部分は、実際には「華僑」表象を通じて表象されているが、同時代評ではその点の指摘がなく、今日でもそれはほとんど変わらない。論者は華僑表象について、その位置づけが地域によって異なり細分化されていること、また、ロマン化されている箇所がある一方で、突き放している箇所もあることを指摘した。その結果、これが近代文学者の中国（人）観という問題設定において欠かせないテキストであることが明らかにされる。

第二章は、従来金子光晴との関わりにおいてのみ論じられてきた森三千代のテキストについて、初めて本格的な研究を行ったものである。論者によれば、よく知られている森の現地報告記『晴れ渡る佛印』には森の文学性が十分に発揮されておらず、森の南洋文学の真骨頂は、『金色の伝説』及び『龍になった鯉』にあるとされている。本論文では、『金色の伝説』の出典を実証的に解明した上で、森のオリジナルと推定された二編を中心として分析している。森は、既成の文字テキスト（文献）を利用して伝説を採集したが、この二編については独自に採集し現地調査を重ねてテキスト化し、『金色の伝説』に加えた。しかもそこには、安南の支配者としての「シナ」の姿が描かれていた。森のこの営為において、文字テキストと非文字テキストの間の往還が一過的なもので終わらず、その後の森の文学の方法となった。

第三章は、童話作家小出正吾の南洋文学に関する、研究史上初の論考である。現地語もできた小出の伝説記述が、森のテキストと同様に注目に値することが評価されている。

第四章では、高見順の『ある晴れた日に』の第三章第三節に描かれたププタンと、ミゲル・コヴァルビアスの ISLAND OF BALI において描かれた puputan の比較考察を通して、前者にププタンを正確に伝えるための演劇的表現を見出すとともに、語り手の当事者性の大小についても検討を加えた。

第五章は、岡本かの子の遺稿『河明り』を対象として、このテキストが南進論とは異なる文脈における南洋（幻想）小説であることを論証した。

第六章では、高浜虚子を中心として、日本領土の拡張にともなう文化的「侵略」とヨーロッパへの日本文化の「伝播」という、論者によれば根源的に表裏一体とされる現象において、日本文学における俳句の特殊な位置が確認される。特に、歳時記の動揺と変容が追究され、一九四〇年前後の俳句という様式の国際性と植民地主義に関する問題が、研究史上初めて提出されている。高浜は、外地の同人や世界中の俳句愛好者たちの要望を考慮して慎重に歳時記を改訂し、自ら熱帯季語を用いて南洋俳句を作り、融通無碍に日本の俳句を守った。近代俳句の定型を守ることで俳句の国際性が増し、かつ伝統化されたことを考えると、高浜は「守旧派」というよりもむしろ老成したモダニストだったのではないか。

第七章では、釋迢空＝折口信夫が、同時代言説に巻き込まれることを回避するために、短歌において「南洋」という言葉を使わずに南洋を詠ったことが追究されている。論一連の歌を作者の歌集編集意識を切り離して総覧することにより、南洋短歌というジャンルを構想することができる。

「終章 南洋文学の一九四〇年代—北原武夫を中心に—」は、複数の異稿が存在する「カリオランの薔薇」と「嘔気」という二つの小説テキストを扱い、一九四五年前後の文学的連続性を論証している。北原と近い位置にいた小林秀雄や坂口安吾の同時代言説との差異についても再検証し、南洋文学を経たからこそ明らかになる北原武夫の独自性を浮かび上がらせ、併せて「徴用作家」の限界についても言及し、本論文の全体を結んでいる。